

絵柄綾織紋衣の否定

廣田 頼道

「芝川」8号の編集後記に、何故当宗において、絵柄綾織の紋衣を着用しなければならないのか——。ということを少し書いた。

私が考えるには、自分をりっぱに見せたい、偉く見せたい、してもらいたいということだけではいかと
思うのであります。

「教弥実位弥下、教弥権位弥高」

の本来あるべき仏法者のあり方を考えると、色相莊嚴に走ろうとする、凡夫の迷情を端的に表わした姿といえるのではないかと思えます。

この様に、名聞名利に直結する絵柄綾織の紋衣は当宗においては無用のものとして根本から考え直さなくてはいけないのではないかと、私は前々から一貫して考えています。

そうしている所に、伊芸益道御尊師の本を読ませていただき、その項目の所にて、それは当然のことを書いているなあと、しごく安心したわけであります。

ただ、羽二重かテトロンかというような論争はさて置き、伊芸益道御尊師の論と、私の主張といささか違うのは、私は、材質の問題ではなく、最初にあげた絵柄綾織紋衣と、こまかく言えば、衣によって階級をつけることの愚ということであります。

日寛上人は、「当家三衣抄」に、強いて但・薄墨を用いるなり

と、「但」という表現を重要な所でされています。「当家三衣抄」の冒頭には、

左伝に曰く、衣は身の章なり、章は貴賤を明らかにするなり云々。

と示され、着用するものは、その人の身分のしるしとして明らかに立場階級を表現するものであることを示されている。であるならば僧侶の法衣は、

夫れ法衣とは法に応じて作る故に法衣と云うなり

と示され、着る者個人の情執、迷情、地位、階級はさて置き、当宗でいえば、大聖人の本因妙の仏法を表現しているものでなければならぬはずであります。

唯当流の法衣のみ薄墨素絹五条にして永く諸門流に異なり

ということがあります。

昔かし、高校を卒業して大坊在勤を終える時、末寺で住職の代僧をしなければいけないということで、教師でない前に、形だけ教師の姿をして、法事や葬式をする為に、富士絹の法衣を師匠からいただいた。この富士絹とは、富士瓦斯紡績が考案して作ったもので、生地は経緯糸に紡績絹糸（出殻繭、屑糸などを処理し、紡績したものを）を使い、一般に平織に織り上げたのち、ガス焼き、精練、柔軟仕上を施し、羽二重のような風合いにしたもので、ワイシャツ地、婦人服地などに使われ、着物の裏地にも使われたが耐久性がなく弱い布で、少し古くなると裂ける所から、今はあまり消費されることがない。つまり富士絹という布地が、今日我々が見ることの出来る素絹ということになる。このことから、素絹とは、元来捨てられるような、出殻、屑糸を節約して織り上げる、絹糸の落穂拾いのようなものといえるわけでありませう。

一方羽二重とは、たて糸をまっすぐによりをかけない生糸を用いて平織にした後、もみ練って柔らかくし、上品な光沢を出したもので、我々が時折、テレビ等で見る、生きたかいこ虫がサナギとなって中に入っているまま、熱湯に入れ、繭の状態が一番美しい時に、かいこ虫を殺生して取り出す、品質のよい絹糸。つまり、素絹は、蚕

が蛾になって出てしまった、いらなくなった汚れた空家の出殻、又、上等の絹糸加工の中で出る屑糸をつむいで、反物に仕立てる。これだけの違いが、素絹と羽二重に代表される上等品との相違であります。

それでは何故、木綿が出てこないかといえば、木綿は熱帯地方から室町時代に渡来して来たもので、一時は大量に生産されたが、日本の風土に基本的に合わず、近代貿易で原産地から大量に輸入する状態になって一般的になったものであります。ですからこの時代には一般的なものではなく、今の木綿の一般的需要のそれは、その時代においては麻が庶民のそれであったわけでありませう。又は、紙に柿渋を塗った紙子などを着ていたのであります。

この素絹の材料は、前にも述べましたように、袈裟を信徒の少しづつの布施布をつなぎ合わせて作ったことと同様に、生活の最低下の所で得られる、落穂拾いの儉約の中で、つむぎ出されたもので、蚕虫の殺生を頭から肯定したものではありませんのであります。僧が法衣として着飾る為に、殺生を平気でするという感覚は、もとよりなかったのであります。

アメリカ人は、牛はもともと人間に食われるもので、

鯨は頭の良い動物だから、食べる人間は野蠻だという理屈を立てますが、この理屈と同じで、蚕虫は絹糸を吐く為の虫だから殺しても殺生にはならないという我慢の考え方は、当宗に限らず、仏教の出發時には、なかつたと考えられるのであります。

素絹というものにこだわる理由と背景は、ここにあると思うのであります。

その意味で、伊芸益道御尊師の主張するテトロン材質ということとは値段の問題などではなく、殺生に関係がなく、日光を受けても溥墨色に変色しにくく、白地が絹のように玉子色や赤茶色に変色せず、時雨に出合つてもシミ等を気にしなくて済むし。日寛上人がいわれるように。

末法折伏行に宜しく、起居動作は最も是れ便なり故に行動雑作衣と名づくくなり、豈東西に奔走し折伏行を修するに宜しきに非ずや

当門の法衣は着飾る為でなく、本因妙の法を表わし、本因妙を行ずる、布教の労働服であると考えることが、まともであると思うのであります。

そして、材質、値段の問題ではなく、念珠を仏の如くせよと示されると同じように、衣も、仏と銘じ、心を込めて大切に、清潔を旨として扱うことが、当宗の法衣、

や仏具の考え方であると思う。高価であるから大切にするといふ考えは信仰上ズレた考えでしかないと思う。

袈裟衣に御金をかけず、その御仁が、ロールスロイスやローレックスをして、法衣より高価なイギリス製の洋服を着ていても、その人の精神構造まで、我々は貧着する必要などないと思う。

夫れ法衣とは法に依じて作る故に法衣と云うなり僧侶として、僧侶たらんと思つて、その人が生きていくか否かはその人の問題であります。

しかし、どんなぜいたくをこらした生活をしている御仁であっても、法衣を着たる時は法を表わし、但溥墨五条の最下位の姿にして法を示す姿をとり、又、御本人も、その一瞬ぐらひは、その法を御自覚遊ばしていただければ、ありがたいことと思うのであります。

僧侶の富貴な、成金感覚な贅沢のレベルに法衣の値段や品質を置く必要など、まったくくないと思つてあります。名聞名利(世事)にしか通じない、絵柄綾織紋衣というものを、一度仏法の上から、落ち着いて考え直さなければいけない時なのではないだろうか。

仏法の為、絵柄綾織紋衣がどうしても必要と考える方は、仏法の為にも議論いたしたく存じます。